

---

## ペルソナ3 《受け継がれる意志》

とあるいぬまる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナ3 《受け継がれる意志》

### 【Nコード】

N4437Z

### 【作者名】

とあるいぬまる

### 【あらすじ】

ペルソナ使いとして目覚めた少年の物語。

ペルソナ3の二次創作で、基本的に原作沿いです。

## 始まりの日

父が死んでからもう十年になるのか

そんな事を考えながら、飾り気のない部屋の中で、高校生ぐらいの少年は馴れた手つきで黒光りする自動拳銃を手にする。

『ベレッタM92』と呼ばれるものだ。  
米軍の制式採用拳銃。

明らかに日本の高校生が持っていていいモノではないのだが、少年にはどうしても必要なモノなので仕方がない。

「もうそろそろかな？」

ベレッタに意識を向けたままの少年は、その眩きと同時に部屋にチラリと時計に目を向ける。

時刻はPM11時59分

それを見て少年は微笑を浮かべた。

ベレッタに装填されているのを確認して、安全装置を外し、枕の近くにゆったりとした動きで置いておく。

まさかこの寮にまで『ヤツら』が来るとは思えないが、念には念をとというやつだ。

こうしてやっと、安心して眠れる。

「ああ……、授業なんか受けたくねえ。寝て起きたら学校。眠らなくても、ゆっくり時間が進んで学校。愚痴ってもこの連鎖からは逃げられねえと理解はしてますけどね」

少年は「ハア」とため息を吐くと、ベッドに身を預けそのまま眠りへと落ちていった。

\*

少年の父は優秀な軍人だった。

フランス外人部隊に入隊し、最年少で日本人曹長となり、数年後にはフリーの傭兵としてあらゆる仕事を請け負うように。

殺し屋に近いものだ。

金を積まれれば何でも請け負ったらしい。

暗殺、破壊工作、護衛。

そういった仕事をしていくうちに、父はいわゆる『汚い業界』でそれなりの名を有するようになってきたころだった。

父にひとつの仕事が舞い降りてきた。

桐条グループの重要実験施設の警備。

実験内容を詮索しないことだけが条件の簡単な仕事なはずだった。

その簡単な仕事が、父の命を奪った。

父は施設の警備中に死んだ。

父が死んで数日後、少年の元に父の死因が届いた。

実験所を狙う者達に殺されたわけではない。

不幸な爆発事故に巻き込まれた。

兵士としてはあまりにも誇りのない死に様だった。

少年はそれを聞き、最初は父との思い出を頭の中に思い浮かべた。父はまだ幼い自分にありとあらゆる戦闘訓練を強要した。

戦闘訓練といっても、流石に銃を扱う訳ではない。

本当に初歩的なCQCと、体力練成。そして色々な知識。

思い出を一通り辿り、少年は次に疑問を浮かべた。

何故、父はこんな仕事を選んだのだろうか？

どれだけ考えても、幼い少年にその答えは出せなかった。

その答えが理解できなかったからなのかは分からないが、同じ道を歩もうと決めた。

闘う道を歩もうと決めた。

しかし、戦い方を、手本を見せてくれる人間はすでにこの世にいなかった。

ずっと、たった一人で優れた兵士になるために体を鍛え、知識を集めた。

父が残してくれたのは、仕事で稼いだ汚い金と、日常生活では使わないであろう知識と、どこで手に入れたかも分からない銃だけ。

その金も、少年が中学生のころにはすでに尽きかけていた。そんな頃だった。

少年が、『ペルソナ』使いとして目覚めたのは。

## 始まりの日（後書き）

はじめまして（――）<

まずは閲覧してくださった皆様、ありがとうございます。  
尽力しますので、どうかよろしくお願いします！！

**転校生（前書き）**

原作キャラの登場回です。

誤字修正しました

## 転校生

朝の教室。

それぞれの生徒がそれぞれの思いを胸に馳せながらそれぞれの行動を取っている。

友達と談笑する者。ひたすらに睡眠時間を稼ぐ者。春休みの宿題を今頃になって取り掛かるという若干というか確実に手遅れです状態の者。

勿論オレ、『沢村一志』もその例に漏れない。

睡眠時間をひたすら稼ぐ派として、机に頭を突っ伏していた。ブレザーが額に当たっている感覚がもうたまらない。

こうしていると茶髪のくせ毛というコンプレックスも忘れられる。そんな幸せ感覚MAXに浸っていた時だった。

「おい、起きろって」

平穩をぶち破る声が鼓膜を揺らした。

この声を俺は知っている。一年生の時に同じクラスになって以来、中々に仲のいい友達……、だった気がする。

反射的にのそつとした動作で顔だけを声の発生源に向けるとやはり見知った顔が、野球帽にちょび髭が特徴的な少年、『伊織順平』が視界に入った。

「んだよ、俺疲れてんだよ手短に頼む、じゃあそう言う事でおやすみなさい。また明日な」

「言葉のキャッチボールどころかこっちに投げてすらこねえ！！俺何かした!？」

「あゝ、分かった分かった。それで何だよ？」

ふわぁ、とあくびをしながら聞いてみると、即座に順平が待ってましたと言わんばかりに目を輝かせる。

無視シカトした方が良かったかと今頃後悔するも、時すでに遅し。なるべく早く眠りにつきたい身としては、話を長引かせられても困る。

「今日さ、転校生が来るらしいぜ。知ってた？ どうだ俺の情報網！ 耳を傾けてみたくなっただろ？」

「いや、いいわ。それ昨日から知ってるし。転校生とは同じ寮だし」

「……何だこの敗北感？ なんつーか、異常に空しくなってきた」  
オレの一言で完全にテンションが下がったのか、順平は肩を落として自分の席へと帰っていく。

その哀愁ただよう背中に若干の罪悪感を感じながら、俺はそのまま机につっぱした。

\*

放課後。

始業式の校長の話も見事に睡眠時間にしたおかげで、眠気はすっかりなくなつた。

転入生の『有里湊』の自己紹介を除いては特に何の変哲もないHRを聞き流し、帰宅準備を終え、朝のお詫びにラーメンでも奢って

やるかなと順平の席に声をかける。

「よう。帰りにはがくれ寄ってこーぜ。俺の奢りでいいからさ」

「お、マジ？もち行くぜ。でも、その前にさ。転校生に声かけねえ？」

「相変わらずだな、お前」

苦笑いしながらも、うなづく。

朝は転校生の事をさも知っているように言ったものの、実は同じ寮に住むことや、自分と同じペルソナ使いということしか知らない興味がないと言えば嘘になる。

それに、転校生というのは何かと不安も多いだろう。自分たちが友好的にする事で、少しでもその不安をなくせるかもしれない。

順平が帰宅準備を終えると同時に、転校生『有里湊』の元へと駆け寄る。

「よう、転校生！！」

「おつかれさん、転校生もとい有里」

「……誰？」

少し驚いたような、警戒心を滲ませたような声で有里がこちらを見つめる。

当然の反応だろう。

転入したての自分に声をかける見知らぬ生徒が2人。どちらも若干不良っぽい見た目（本人たちに自覚なし）だ。

しかし、当の本人たちはそんなことは気にせず（というより自覚

がない)続ける。

「オレは伊織順平。ジュンペーでいいぜ。んでこっちは」

「沢村一志。カズシでいいよ。転校したてって気まずいと思うけど、俺達には気軽に話しかけてくれていいから」

「んだよ、カズ。それオレが言うつもりだったのに!! ま、そういうわけだ。よろしくな転校生!!」

と、俺たちが転校生に友好的かつナイスガイな感じを醸し出している時だった。

『……ハア』

呆れたような溜息が聞こえた。

反射的にそちらを見るとピンクのカーディガンを着た少女が視界に入る。

『岳羽ゆかり』

彼女も自分や有里同様、ペルソナ使いだ。

去年もクラスが同じだったという事もあり、どちらかというところしい方だと思う。だから、だろうか。自分や、特に順平に対しては容赦がない。

「なんだよ岳羽さん。別にオレ達変なことしてねーぞ。な、順平?」

「そうだぞゆかりっち。オレ達はいま、いいやつ侍してるだけだつて」

「相変わらずよね。誰これ構わず馴れ馴れしくして。ちょっとは相手の迷惑とか考えた方がいいよ」

「いや、親切にしてるだけだって」

「ふうん。なら、いいんだけど」

そこまで言うと、彼女は有里の方へ視線を向け、

「でも、偶然だよな。まさか同じクラスになるなんてさ」

「そうだね」

「うん、驚いたよ」

幾分、彼女が柔らかい口調になったのを俺達は見逃さなかった。

オレは微笑を浮かべ、順平の方を見る。順平も同じ思考に至っていたのか、笑みに笑みを返してきた。

どうやら何をすべきかは分かっているようだ。

「あれ？ 何かオレ達と扱いが違うような気が……。なあ順平さんや」

「そうだねカズさんや。そう言えば、お二人さん、今日仲良く一緒に登校したんだって？ ちょいと聞きたいことがあんだけど」

「えっ、ちょっとやめてよ！」

ニヤニヤとしたオレ達に焦りを感じたのか、若干大きめな声でゆかりは否定する。

「彼とはたまたま寮が一緒っただけ。沢村君は知ってるでしょ？  
何でもそういう話に結びつけすぎだっただけ。ってか噂になるの早すぎ……。不安だな、そういうの」

ゆかりは若干顔を曇らせ、また有里の方を見る。

おそらく昨日の影時間になにかあったのだろう。それを思い出して口止めに釘をさしておきたいと言ったところだろうか。

そんな事を考えながらオレはゆかりの言葉に耳を澄ます。そして、

「昨日の夜のこと、ホント誰にも言わないでよ？」

「……………」

順平も聞こえていたのか、二人して固まった。

転校生（後書き）

閲覧してくださった皆様、ありがとうございます！  
— — — — —  
<

## タルタロス(前書き)

初めての戦闘回です> | | ( ) <

## タルタロス

突然だが、一日は24時間ではない。

『影時間』。

普通の人間では感じることもすらできない隠された時間。

敵性のある人間のみがそれを感じ、『影時間』にのみ存在する『シャドウ』と呼ばれる謎の異形に立ち向かう事が出来る。

その敵性のある人間は、『ペルソナ使い』と呼ばれ、誰にも知られることなく暗躍していた。

\*

## 影時間

俺は『タルタロス』と呼ばれるシャドウの巣窟の中で、銃口を前方に向けいつでも撃てるよう、ブルパップ式の突撃銃『IMIタボールAR21』を構えていた。

日々その内部構造を変化させ続ける謎の塔。詳しいことは分からないが、関係ない。

分からない事はこれから調べればいい。徐々に仲間のペルソナ使いも増えてきて、そろそろ本格的にこの塔を探索する時もあるだろう。

さて、ここで問題だ。

今日はまだその時ではないのに、何故俺がここにいるのか？

その理由を一言で言うならば、『何故親父は銃を手にし、戦う世

界を選んだのか?』

その答えを知ってしまったから。

AR21の銃口を前方に向けながら、警戒しながらゆっくりと慎重に歩みを進める。

額から汗が一滴垂れてきた。多少、緊張しているらしい。

しばらく歩いていると、前方に曲がり角が見えた。

「……」

息を殺しながら、前方の曲がり角に達すると、俺はあることを確信しながら壁に背を預ける。

経験からくる感覚というやつだろうか。

見なくても分かる。この曲がり角の先にヤツらが、シャドウがいる。ゆっくりと影から顔だけを覗かせると、視界に三体のシャドウが入った。幸い三体とも自分に背を向けている状態だ。

つまり、先手はこちらのもの。動かない手はない。

出来るだけ音を立てないように、角から体を出し、片目を伏せてAR21のドットサイトを覗く。赤い点をシャドウに重ね、息を吐きながら引き金に指をかけた。

「捉えたぜ」

瞬間、引き金を引く。それと同時に一体のシャドウがピクリと体を痙攣させ、そのまま黒い粒子と化す。

一丁上がりだ。

発砲音に気づき、残りの二体がこちらに向き直ろうとするだろうが、関係ない。

すぐに、ドットサイトの赤い点をもう一体に重ね、引き金を引く。放たれた弾丸は標的に吸い込まれるように空気を引き裂き、そして

標的をくりぬいた。

これで残りは後一体だけだ。

その一体が完全に自分を視界に入れるとほぼ同時に、弾丸を3発ほどくれてやる。

空のケーシングが飛び出し、小さな金属音を奏でた時には、すでに視界にはシャドウの姿は無かった。

「まさに敵なし、だな」

自分の腕に酔っているわけではないが、客観的に見ても今の動きにはキレがある！……と思う。

とは言っても、いつまでも悦になっている場合ではない。

銃声に気づき、他のシャドウが集まってくる可能性がある。5体ぐらいままでなら何とかかなりそうだが、AR21の30発マガジンでは大勢のシャドウを相手にするには十分とは言えない。

他の仲間の支援があれば、ブルパップ方式であるAR21のリロードの隙も見せられるだろうが、今回は一人だけだ。一応サイドアームとしてベレッタを持ってきてはいるが、あまり期待し過ぎない方がいいだろう。

そう思い、踵を返そうとしたその時、

「……前方に五体か」

視界の先には5体のシャドウが現れる。

殺さない理由はない。挟まれたら少々マズイが、5体とも自分の前方にいるのだ。撃つてくれといわんばかりに。

「折角来てもらったのに悪いな。別の所に逝ってもらうぜ」

皮肉に答えるようにシャドウが吠え、こちらに距離を詰めてきた。

それをドットサイト越しに見つめながら、特に力まずに人差し指を引き金にかける。

残弾のこりは少々気になるが目の前の相手には十分足りるだろう。そんなことを考えながら、俺は再び引き金を引きはじめる。

五体のシャドウが消えるのに、そう時間はかからなかった。

## タルタロス（後書き）

閲覧してくださった皆さん、ありがとうございます！  
「」  
「」  
＜  
無双になるのかどうかの微妙な戦闘回でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4437z/>

---

ペルソナ3 《受け継がれる意志》

2011年12月17日04時00分発行